



TITLE:

プレハーノフのロシア資本主義論 (一)

AUTHOR(S):

田中, 真晴

CITATION:

田中, 真晴. プレハーノフのロシア資本主義論(一). 経済論叢 1962, 89(5): 421-439

ISSUE DATE:

1962-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132883>

RIGHT:

經濟論叢

第八十九卷 第五號

プレハーノフのロシア

資本主義論(一)……………田 中 真 晴 1

日本海運業における減価償却の

生成過程(その二)……………高 寺 貞 男 20

独立採算制の歴史的地位……………上 島 武 45

シュマーレンバッハ原価計算

理論について……………野 村 秀 和 60

昭和三十七年五月

京都大學經濟學會

プレハーノフのロシア資本主義論(一)

田 中 真 晴

一九世紀末のロシア資本主義論史においてプレハーノフが占める位置の独自性は、七〇年代ナロードニキに特徴的な二つの、可能性の思想の後、八〇年代前半に出現し伝播したロシア資本主義没落論に対抗して、ロシア資本主義発展論をはじめて展開したことにある。わたくしは前稿において、このような見直しを、一九世紀末ロシア資本主義論史の段階設定の試みのなかで述べた¹⁾。本稿の課題は、このことをプレハーノフ自体について具体的に検討することである。

プレハーノフのロシア資本主義論は、七〇年代―八〇年代初頭のナロードニキ革命運動の脈絡のなかで、まずもって理解されねばならない。しばらくナロードニキ運動のなかにおけるプレハーノフを見よう²⁾。

プレハーノフ *I. B. Иксанов* (一八五六―九一八) はタムボフ県の貴族とはいえ小さい地主(その所有地は一〇〇デシヤチンとも二〇〇デシヤチンともいう)の家にうまれた。家庭の空気はわりあい開明的で、母は評論家ベリンスキーの縁戚の娘であった。プレハーノフははじめ軍人志望で士官学校に入学、志を変えてペテルブルク鉱山専門学校に

転じ、その在学中に、当時の学生たちをつかんだナロードニキ主義の運動に入つていった。かれが加入したのは「ブンタリー」と呼ばれるバクーニン派の団体であつた。かれはやがて七六年秋に成立した「土地と自由」結社に参加、ペテルブルクの労働者たちに接触し、カザン広場でのデモンストレーションの演説(一八七六年十二月六日)、サラトフの農村工作(一八七七年夏)などの経験をつんだ。かれは一八七八年春に「土地と自由」結社の綱領(第二次綱領³⁾)の起草に加つたとも伝えられおり、同年末にはドン地方コサックの動きとペテルブルクの新木綿紡績工場の労働問題についてのルポルタージュを機関誌「土地と自由」に寄せ、七九年のはじめには前稿でその一部を引用した論文「社会の経済的發展の法則とロシアにおける社会主義の任務」を同誌に掲載、「土地と自由」誌の編集にも参加するなど、結社内の指導的理論家のひとりとして目されるようになった。しかし間もなくかれはつぎのような経緯のために、革命運動の主流から離れることとなる。

「土地と自由」結社⁴⁾は、そのうちに種々な傾向をふくむが、元来はバクーニン主義の色彩の濃い綱領をもち、人民の蜂起の準備工作を主たる活動方針としていた。ここに人民というのは、農民と都市労働者から成り、後者は前者の一分肢として把握されることによつて結局は人民⁵⁾農民であるのだが、農民には一揆を、労働者にはストライキを、かれらは期待し準備した。かれらは体制変革的な全人民的蜂起にいたるまでには工作期間を必要とすることを覚悟して、都市と農村において働いた。その反面、「土地と自由」の綱領は、政治的自由の獲得のための、絶対主義との闘争については触れることなく、「政治闘争」をむしろ否定していた。権力問題は「土地と自由」の盲点であつた。

「土地と自由」結社のなかにおいても、南部派はテロリズムの急進主義の傾向をもつていたけれども、それは結

社の大勢を制してはいなかった。ところが、人民蜂起の準備工作がめぼしい成果をあげないでいるのに、当局の追求はきびしく、どのような平和的な活動様式でも苛酷な刑罰をもって報いられ、犠牲者が続出するという現実につきあたって、結社内の空気は変つていった。ヴェーラ・ザースリッチが、同志に体刑を加えた警視総監トレポフを狙撃して傷を負わせたとき（一八七八年一月二四日）、この報復テロルには拍手がおくられた。逮捕にきた官憲に対する武力抵抗は、コヴァリスキーの例（一八七八年一月三日）以後、次第に多くなった。しかし、報復テロルや武装抵抗がおこなわれただけではない。理論そのものにある種の変化がおこった。政治的自由なくしては何事もなしえない、そして現在の専制のもとにおいては政治的テロルこそ政治的自由を当局からちとるための唯一の有効な手段であるという考え方が、次第に力をえてきた。ヴェーラ・フィグネルの回想によれば、「一八七六年、結社（土地と自由）の創設のさいには、重心は農村での活動、人民蜂起の準備と組織化にあった。〈中央への打撃〉は当時は大衆のなかでの事態に依存させられていた。これに反して一八七八年から七九年にかけては、この〈打撃〉が活動方針の首座を占めた。まさしく、これが生き生きとした人民の力をとき放つであらう、政府の組織が破壊され、混乱した瞬間にこそ、人民の力を噴出させるであらう、と思われた。党のすべての力と努力は、この瞬間をつくりだすために集中されねばならない、と考えられた。」結社内の政治闘争派（テロリズム派）は、機関誌「土地と自由」とは別に、モロゾフとチホミロフの編集によつて「〈土地と自由〉小新聞」《Донецк Земли и Воли》を發行（七九年三月より同年六月まで全六号）、それには「政治的暗殺はなによりもまず報復行為であり、現在の状況におけるただ一つの防衛手段である。しかし同時に煽動の最良の武器の一つでもある。」それは「全機構を震撼させるために」必要を手段であり、「専制主義に對抗するもっとも重要な武器の一つである。」と述べられている。

「土地と自由」結社内におけるこのような動向に対して、ブレハーノフはポポフらとともに、旧綱領の線をまもらうとした。テロル派と旧綱領派との対立は、ソロヴィヨフのアレキサンドル二世暗殺計画をめぐって尖鋭化した。七九年四月二日ソロヴィヨフの一弾は発射されてしかも失敗におわった。政府はただちに、露土戦争で勇名をはせた將軍たちをベテルブルクなど重要六県の「知事・軍司令官」に任命、県単位の軍事的独裁をしき、シアーはクリミヤに退避、任命された特別委員会は警察力の強化・出版の制限等の手を打つとともに、国民に政府支持を求めて種々の有和策をも考案した。⁷⁾「土地と自由」結社のがわでは、テロルの客観的効果について思い迷っていたメンバールの多くも、すでに決定的な事実が起きたからにはその道を行くはかないと決意して、テロル派の路線に固まっていた。結社内における「自由か死か」派⁸⁾の生成と発展はテロル派の制覇過程をあらわしている。同年六月ヴォロネシ会議ののち、「土地と自由」は分裂、テロリズム・グループ「自由か死か」を中核とする多数派は「人民の意志」党を結成、反テロル・旧綱領賛成の少数派は「黒色再分割」とみずからを名付けた。ブレハーノフが後者の指導者であつたことは知られている。

ブレハーノフは後年ヴォロネシ会議のことを回想して「わたくしはつぎのようなゆううつな確信をもってヴォロネシからキエフへと旅立つた——すなわち、当時わたくしにはロシアにおいて可能な社会主義の唯一の種類だと思われていたナロードニキ主義が、主としてナロードニキ自身の非論理性のために滅びつつあるという確信をいだいて」と述べている。しかしブレハーノフのこの確信は過大評価されてはならない。¹⁰⁾かれのテロリズム反対についても同じである。たしかに「人民の意志」派は結局においては敗北したし、「人民の意志」派が理論的弱点をもっていたことも事実である。けれども、七九年の時点に即して云えば、むしろブレハーノフは絶対主義に対する政

治的闘争、政治的自由獲得の必要性、喫緊性を理解しなかったことにおいて、むしろ革命的ナロードニキの主流に對して、決定的な点で、お、く、れ、て、い、た、の、で、あ、る。プレハーノフには「みずからの非論理性のために滅びつつある」と思われたナロードニキ主義が、実は「人民の意志」派として、アレクサンドル二世に對する累次の暗殺計画とその成功（一八八一年三月一日）を軸に、絶対主義に對する白兵戦を展開し、それを震憾させた。そしてプレハーノフ自身、かれにとつては意外のこの現実の展開に、ある意味では教育せられ、ある意味では譲歩と承認とを強いられるのである。かれはやがて「いわゆるテロリズム運動が……政府に對する意識的、政治闘争の時期をつくりだした」「われわれの運動に新しい局面を開いた功績は疑いもなく（人民の意志）派に属する」と認め、テロルを有効な戦術として肯定する。

かれは一八八〇年のはじめに亡命し、かれをリーダーとする「黒色再分割」派は消滅状態に陥った。かれはロシアの革命運動へのつながりをもつためには、「人民の意志」派企画の『ロシア社会革命叢書』や、「人民の意志」派の在外機関誌『人民の意志通報』（*Вестник Народной Воли*）（スイスで発行。一八八三—八六（八七？）の間に五号）に参加しなければならなかったのである。¹²⁾

〈自由か死か〉派から「人民の意志」へと結集してゆく大勢に對して、その「非論理性」に堪えがたいものを感じてついでゆけなかつたという、プレハーノフの述懐には、かれの思想的体質の一面がよくあらわれているように思われる。かれはナロードニキ時代の論文においても、客観的法則の認識を第一義的なものとして尊重する立場をとつていて、行動的主体性派とはどこかそぐわぬものをもつていたようである。そしてこの傾向はその後のかれの思想と行動を一貫しているといえるであろう。八〇年代の初頭、ときには封筒の上書きのアルバイトまでしなけれ

ばならなかったほどの、亡命地での不如意な生活のなかで、「人民の意志」派のヒロイックな闘いはるかに見ながら、かれがひたすら求めていったのは、いわば寸分のすきもない、非論理性のかげりのまったくない社会主義理論であつた。そしてかれはそれを、「最新の科学的理論」「科学的社会主义」のうちに見出したと信じたのである。¹³⁾ やや先走つていうならば、ブレハーノフのマルクス主義は、マルクス主義内部の客観主義、あるいは客観主義への偏りにある、マルクス主義であつたと、わたくしは考えている。¹⁴⁾ そして、そうしたものとして理解することによって、ブレハーノフをブレハーノフなりに一貫したものとして把握することが可能であり、必要であると思う。¹⁵⁾ だがここではこの点に立入ることはできない。ここではさしあたり、ブレハーノフの客観主義的傾向そのものに注目しておきたい。

さて、ブレハーノフは亡命地においてマルクス主義へ移行したのであるが、マルクス主義理論を知つたのはそれ以前であつた。かれは前稿で触れた論文「社会の経済的發展とロシアにおける社会主義の任務」(一八七九年)においてすでに、マルクス理論をナロードニキ的信条と抵触することなしに利用しており、また、コントの三段階説になぞらえて社会主義の三つの發展段階を区分し、ロートベルトウス、マルクス、エンゲルス、デューリントを「社会主義の發展における実証主義の時期の輝かしい巨星たち」と称していた。¹⁶⁾ しかしかれ自身の後年の述懐によれば「このマルクス主義はバクーニンの教説というブリズムを通して私の知るところとなつた」¹⁷⁾ものであり、唯物史観は政治闘争否定の経済史観に変質させられて受けとられていた。ブレハーノフのマルクス主義への移行とは、バクーニンの教説というブリズムを外さず、それを叩き割ることによつて、マルクス理論それ自体に参入することに他ならなかつた。かれは国家・政治闘争の否定、共同体の崇拜、プガチョフ、ラージン型の農民一揆の拡大再生に対する期待などの、バクーニン主義的要素を清算して、八三年ごろには、マルクス主義理論家として自己を再編確立し

おえていた。『共産党宣言』のロシア語版への序説（一八八二年）および、いっそう明瞭には『社会主義と政治闘争』（一八八三年）において、かれはマルクス主義理論の立場から、かつてはかれ自身が指導者であった「黒色再分割」派の政治闘争否定・経済主義的一面性と、「人民の意志」派の基礎過程無視・政治主義的一面性とに対して両面批判をおこない、ナロードニキ主義との理論的袂別をとげた。かれが中心となってロシア・マルクス主義者の団体「労働解放」団（於ジュネーヴ）を結成したのも、同じ一八八三年である。

しかしながら、たんにマルクス理論の優秀性を説いてナロードニキ理論の欠陥を批判するだけでは、革命運動の実践に対してもつひびきはそんなに強くはありえない。ひとたびはナロードニキ革命運動の主流から疎外されたブレハーノフが、いま一八八三—一八四年の時点において自信をもつて提起したのは、きわめてアクチュアルな内容をもつ批判であった。それは、ロシアの経済的・社会構造の現状と近い将来における発展過程についての新しい認識の提出と、革命運動はこの新しい認識を基礎として再編されねばならぬという提案をふくんでいた。この新しい現状認識とは、ロシアはすでに資本主義の道に決定的に入りこんでしまった、それゆえ近き将来は資本主義のものであるという認識、すなわちロシア資本主義発展論である。ブレハーノフのマルクス主義への移行は、ロシア資本主義発展論の提起と結びつき、それを内的構成要素とすることによって、ロシアの革命運動に対するアクチュアルな批判をおこないうるものとなったのである。その具体的な内容は次節以下で知られるであらう。

ブレハーノフによれば、マルクス理論の基礎的諸原則は本来、三段論法の〈大前提〉にすぎないのであって、この第一前提の正しさと偉大な科学的意義とを認める点では意見を同じくするひとびとが、第二前提すなわち〈小前提〉——この役割りを果すのがロシアの現実のあれまたはこれの評価である——の理解の仕方に応じて、結論にお

いては互に意見が一致したり分れたりしうる。」¹⁸⁾ブレハーノフは「社会の経済的發展の法則とロシアにおける社会主義の任務」においては、前稿において述べたように七〇年代ナロードニキに特徴的な二つの道の可能性の思想にたっていた。ブレハーノフは右の引用文にいう〈小前提〉の理解において、そこからロシア資本主義發展論へと進んでいった。移行期の諸労作におけるその進行過程を跡づけてゆく余裕はないが、研究文献の示すところによれば、ほぼつぎのごとくである。ブレハーノフは「社会の経済的法則と……」を書いて間もなく、コヴァレフスキーの共同体解体の理論とオルローフのモスクワ県についての実態調査からつよい衝撃を受け、ロシアの共同体の危機的様相に対する認識をふかめた。しかし「土地共同体とそのありうべき将来」¹⁹⁾(一八七九年執筆、一八八〇年一月発表)においては、かなり苦しい論理を用いて、共同体の内部的矛盾を否定し、共同体の危機をもっぱら外生的原因に帰することによって、共同体から社会主義への直接的移行の可能性の理論を擁護している。だが一八八一年末のラヴローフへの書簡になると「御存知のとおり、わたくしは、ロシアはすでにその發展の自然法則の道に入った、それ以外のすべての他の道は、ロシア以外の国にとっては考えられるかも知れないけれども、ロシアにとっては閉ざされた、という意見をもっています」²⁰⁾と書いている。したがって、ブレハーノフが二つの道の可能性の思想を放棄してロシア資本主義發展論へ踏みきったのは、一八八一年、おそらくは人民の意志党によるアレクサンドル二世暗殺(同年三月一日)以後であろう。²¹⁾「人民の意志」党がその闘争の頂点を過ぎて、急速に下降線をたどり、ツァーリズムの反動の嵐がロシアをおおいつつあったとき、ブレハーノフは自己の思想を明確にしていた。一八八一―八二年のかれの論文や書簡には、共同体再生の希望や、西欧対ロシアという対立図式を固執する独自性論者たち Самобытшичи に対する批判が目立ってくる。²²⁾そしてかれは、前述の『社会主義と政治闘争』にいたって、マルクス主義の基礎理論とロシア

資本主義發展論とを巧みに結合して、以下にみるような、ロシア革命の新理論を展開したのである。

① 「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」〔『経済論叢』八九巻一号〕を参照。

② プレハーノフの伝記(回想録)とフツ [Fein, J. T.; F. B. Hlaxanor, 1922. *Аннексан, О. В.; F. B. Hlaxanor, 1924.* あるいはともに筆者未見。以下の記述は、マルサーエフ「プレハーノフ伝」(竹尾訳「我等の対立」改造文庫 付録として訳著) Fomina, W. A.; Die philosophischen Anschauungen G. W. Plechanows, 1957. Боров, И. М.; Экономические взгляды Г. В. Плеханова, 1960. などの研究文献のなかの伝記的部分、和田春樹「プレハーノフおぼえがき」〔『ナウカの窓』第六巻十号〕、Venturi, F.; *Roots of Revolution, A History of the Populist and Socialist Movements in the Nineteenth Century Russia*, 1960. およびマース・マース・マース「ロシアの夜」(金子、和田共訳『世界文明の夜』全集)⑬所収)のプレハーノフに關説している部分等を参照しよう。

③ この綱領は *Народническая экономическая литература*, 1958. стр. 340-46. に所収。しかし同書の註解には第二次綱領の起草者が記されている。

④ 「土地と自由」については、前註の綱領をもよく見て、Venturi, F.; op. cit., pp. 557-637. のほか、和田春樹「土地と自由」主義の革命理論」〔『歴史学研究』二四一号〕が力作である。ただし、和田氏は近稿「近代ロシア社会の構造」(歴史学研究別冊「世界史と近代日本」所収)のなかで、前稿の論旨を自己批判しておられる(同誌五頁)。

⑤ Figner, W.; *Nacht über Russland*, 1926. S. 97. 金子・和田訳六六頁。筆者はロシア語原典を見ないが、このあたりは独訳にあつて邦訳に欠けているところ、逆に邦訳にあつて独訳に欠けているところがある。本文引用のはじめの句は邦訳にはなく。

⑥ Venturi, F.; op. cit., pp. 629-30. ⑦ Ibid., p. 633 ff. ⑧ Ibid., p. 640 f., Figner, W.; Ibid. SS. 99-101.

⑨ Плеханов, Г. В.; *Почему и как мы разошлись с редакцией «Вестника Народной Воли»*, 1903. Вып. V. XIII. стр. 24.

⑩ プレハーノフ研究文献の多くは、マルクス主義はナロードニキ主義よりもヨリ高次の理論であるという大前提から、プレハーノフのナロードニキ(とくに人民の意志派)批判を、マルクス主義への、すなわちヨリ高次の理論への移行という観点だけで考察する傾向がある。そうすると当然のことながら、当時の革命陣営内におけるプレハーノフの位置(プレハーノフの弱点

をふくめての)は見失われることになる。そしてそれとともにブレハーノフの思想的体質の重要な側面が見落される。この点、和田氏の註②に挙げた論稿は小論ながら、ブレハーノフの発想法の特質に迫ろうとした異色作で、示唆的である。

- ⑪ Плеханов, I. B.: *Историческое происхождение*, т. I, 1956, стр. 52, 65. 『社会主義と政治闘争』(本稿第二節の註を参照)のなかの言葉。

- ⑫ ブレハーノフは一八八〇年以後、「人民の意志」派の発行する『ロシア社会革命叢書』《Русская социальная-революционная библиотека》の刊行に参加。『人民の意志通報』の編集者は、ラヴロフ、チホミロフ、ブレハーノフの三人であった。Vgl. Fomina, W. A. op. cit. S. 48. ブレハーノフの「人民の意志派との完全な実践的訣別は一八八三年以後のことであった。本稿第二節註②を参照。ただし、ブレハーノフが人民の意志派と協働していたことがすなわちブレハーノフのナロードニ

キ思想の未克服を意味するとはいえない。

- ⑬ 「最新の科学的理論」「科学的社會主義」という言葉は『社会主義と政治闘争』『われわれの相違』その他に溯出する。ブレハーノフは、マルクス・エンゲルスの諸著作のなかでも、客観主義的・科学主義的色彩の濃い、エンゲルス『反デューリング論』『フォイエールバッハとドイツ古典哲学の終末』などからもっとも多く学び、それに親近的であつたように思われる。

- ⑭ ブレハーノフのマルクス主義は、マルクス主義内部の客観主義であつて、レーニンがストルヴェを評して客観主義者であると評した規定は、そのままではブレハーノフにはあてはまらない。レーニンがストルヴェの見解を客観主義と名付けたのは、唯物論の見解と対立するものとしての客観主義、すなわち、たんに歴史的必然性を語るのみで、「階級的矛盾」をむしろ隠蔽し、「党派性的見地」というものをもたない見解、という意味である。レーニン「ナロードニキ主義の経済学的内容とストルヴェ氏の著書におけるその批判」(『レーニン全集』第一卷四三—三二頁)を参照。ブレハーノフはこの意味での客観主義者ではない。かれは唯物論の見地に立ちながら、経済過程の政治過程に対する規定性を過大に評価する傾向をもつて、したがって革命主体の自由な歴史創造の可能性の幅を狭く考へる傾向をもつて、客観主義的なのである。およそマルクス理論を採るひとならばすべて、下部構造の上部構造に対する基礎的制約性と、上部構造の下部構造に対する相対的作用力を認める。ブレハーノフもまた、歴史に対する意識の能動的意義について興味ぶかい考察を加へ、一定の範囲内でそれを認めている。ブレハーノフ『歴史における個人の役割』(木原正雄訳。西牟田・直野訳の二種あり)を参照。しかし、具体的な問題について

の判断となると、下部構造の基礎的制約性・上部構造の相対的作用をどのように評価するかのがいがあらわれてくる。ブレハーンフのばあいには、下部構造による制約性がつよくおしだされて、過程の必然性が強調せられ、一定のワク内での諸可能性という発想が殺される。わたくしは、ブレハーンフとレーニンとの後年の対立は、このことに深くかかわっていると思う。後論を参照。因みに、マルクス・エンゲルスの思想のなかのどの要素を強調するかによって、いかに相対化するマルクス主義像が結ばれるかの最近の一例として、プロレタリア的・革命的伝統の直系としてのマルクス主義を強調するガローディと、合理主義思想の系譜を強調するルフエーヴルの対立がある。ガローディ『近代フランス社会思想史』(平田清明訳) ルフエーヴル『カール・マルクス』(吉田静一訳)を参照。

- ⑬ 現代ソヴィエト学界では、ブレハーンフの思想的展開の時期区分を (1) ナロードニキの時期 (2) マルクス主義の時期 (3) メンシェヴィキの時期 とするのが通説になっている。プロウヴェルは、右の各時期の年代を (1) 一八七六—一八八三年 (2) 一八八三—一九〇三年 (3) 一九〇四—一九一八年としている。シドロフは(1)の始期を一八七五年、(3)の始期を一九〇三年とする点においてプロウヴェルとちがうだけで、本質的な相違はない。フォーミンも同じである。О. Брове, И. М.: Экономические взгляды Г. В. Плеханова, 1960. Сягров, М. И.: Г. В. Плеханов и вопросы истории русской революционно-демократической мысли XIX в. Фочина, В. А.: Философские взгляды Г. В. Плеханова, 1956. 同様の時期区分では、ブレハーンフがレーニンに対立してメンシェヴィキに移ったことが、ただちにマルクス主義からの脱落と解されている。これはあまりにもレーニンを絶対的基準として、レーニンとの同調またはレーニンからの距離によって評価する仕方である。ブレハーンフのメンシェヴィキの見解はかれの思想的傾向をそれ自体の展開として、まずもって内在的に理解されねばならない。またメンシェヴィズム≠非マルクス主義とするのも疑問である。メンシェヴィズムはやはりマルクス主義内部の一派として理解されるべきであらう。この点、リャザノフがブレハーンフ全集の編者序文において、ブレハーンフの著作活動の区分を (1) 準備期。ブレハーンフが革命的ナロードニキから革命的マルクス主義者へ移行した時期(一八七八—一八八二年) (2) ロシア・マルクス主義の創設者で、諸種の動揺はあつたけれども、革命陣營のなかにいた時期(一八八三—一九〇四年) (3) メンシェヴィキとさえも不和となり、労働運動との関係をほとんどすべて失った時期(一九一四—一九一八年) としているのが示唆的であると思う。О. П. В. Плеханов, Сочинения, т. I, стр. 7.

⑮ Пеханов, Г. В.; Соч. т. I, стр. 37. フレイバーンは「実証主義の時期」の特徴を「社会発展の法則」の基礎的意義を認めたことにあるとしている。これに反して、陰謀主義的または慈善主義的なのが「神学的段階」、人民のなかでの宣伝をめざすが、「社会発展の法則」の認識を欠くのが「形而上学的段階」である。フレイバーンの合理主義的・客観主義的傾向はすでにこの処女論文において明確にあらわれている。註⑭を参照。

⑯ Пеханов, Г. В.; Соч. т. I, стр. 26. Предисловие к первому тому первого издания собрания сочинений, 1905.

⑰ Пеханов, Г. В.; Избранные философские произведения, т. I, стр. 121. Наши разногласия, 1885.

⑱ Пеханов, Г. В.; Поземельная община и ее вероятное будущее. (『ロビンの書』誌一八八〇年十一月号に掲載。Соч. т. I, стр. 75-107). Ковалевский, М.; Обширное землеуделение, причины, ход и последствия его разложения, ч. I, 1879, Орлов, В. И.; Форма землеуделения в Московской губернии. (『著者』それ以後のフレイバーンの前掲論文にせよ) 反論は『著者』Минин, И. В.; Переход Г. В. Пеханова от народничества к марксизму. Вопросы Истории, № 12, 1956. および中村義知「一九世紀後半におけるロビンの農業共同体とマ・サ・フレイバーン」(『政経論叢』七卷一・二号)を参照。

⑲ Литературное наследство Г. В. Пеханова. Сб. VIII, стр. 210. Бровер, И. М.; Указ. Соч. стр. 24. の引用に拠る。

⑳ 服部文男「エム・カラターエフ、エム・ルインチナ共著『経済学説史』(講義教壇)——マルクス主義の成立から大十月革命まで」(『研究年報』『経済学』二三卷三号、一二四頁)をも参照。

㉑ この時期の論文として、「経済学の領域における新しい傾向」(『Новое направление в области политической экономии』(『祖国の記録』誌一八八一年十一月号に掲載。Г. В. Пеханов, Соч. т. I, стр. 168-215. 同所収)と「カール・ロートヘルトツ・マ・ヤンソンの経済理論」(『Экономическая теория Карла Родериха-Янсона』(『祖国の記録』誌一八八二—八三年に掲載。Г. В. Пеханов, Соч. т. I, стр. 216-364. 同所収)がある。その論文は Meyer, M.; Die neue Nationalökonomie in ihrer Hauptrichtungen. ほか一冊の書評のかたちで「ドイツ歴史学派の倫理主義的・社会政策的立場を批判し、かつ限界効用価値説に反対して、労働価値説を正しいとしている。あとのはうの論文は相当な力作のようで、ロートヘルトツが古典経済学から前進して「この科学(『経済学』)にあたりし寄与をした」ことをたかく評価して、その「価値論」「資本の概念」「地代論」

「恐慌論」などを紹介・検討している。そのさいブレハーノフは基本的・大綱的にはマルクス『資本論』（第一部）に依拠して、そこからロートベルトウス理論を見ている。ブローツェルによれば、ブレハーノフはロートベルトウスとマルクスの資本概念をあまりに親近的に考えすぎ、フッサールの貨幣鉄則を採用し、絶対地代の存在を否定するなどの誤りをおかしているという。См. Броев, И. М.: Указ. Сов., стр. 28-44. しかし、ブローツェル自身もそのことを無視しているのではないが、『資本論』第二部以下の未刊、「ポータ綱領批判」（發表一八九一年）の未発表という、当時の条件を考えにいれるならば、個々の論点の欠陥をあげつらうよりも、ブレハーノフがマルクス経済理論について当時としてはすぐれた理解を示していることを強調すべきであろう。ともあれ、右の二論文は、ブレハーノフがマルクス主義の経済理論の面における理解をふかめていたことを示している。

ブローツェルのみならずポリヤンスキーやカラターエフなども、ブレハーノフがナロードニキヤ、ラッサール、ロートベルトウスの思想を、マルクス主義の立場から徹底的に批判しつつも、それらの思想の一部をかれ自身のマルクス主義理論のなかに混在させた点があることを熱心に指摘し、まさしくそこにブレハーノフのマルクス主義の不十分さの重要な一つの根拠を求めている。私はかれらの指摘する「理論の混在」の事実のすべてを否定するのではない。しかし、ブレハーノフのマルクス主義の「不十分さ」の決定的な根拠は、前マルクス主義的思想の未克服や混在にあるのではない。むしろブレハーノフは当時としては異数といっているほどに、マルクス主義理論を前マルクス主義的諸理論から厳密に区別したのであるが、そのマルクス主義理論の理解自体が、さしあたり註⑩で指摘したような、偏りをもっていたこと、このことが決定的であると思う。

なお、右の二論文のほか、この期の書きものに短文ながら重要なものとして『「共産党宣言」のロシア語版への序文』（『Приписованье к русскому изданию "Манифеста Коммунистической Партии" (一八八二年) Сов. I, 150-52. 所収）「A. H. Штатман」《A. H. Шатнов》（『人民の意志通報』第一号、一八八三年に掲載。Сов. II, стр. 10-20. 所収）がある。

二

ブレハーノフは『社会主義と政治闘争』において、あたらしいロシア革命論を展開した。かれはこの書において

マルクス主義の基礎理論とロシア資本主義発展論とを軸として、ロシアの現状と近き将来について、人民の意志派のいだいていたビルトとは本質的な諸点で異なるビルトを提出した。ブレハーノフはその構想を、『われわれの相違』²⁾ およびそれ以後において変ることなく保持しており、『われわれの相違』はその構想の綿密な基礎づけでもある。

ところで、ブレハーノフのロシア革命論はロシア資本主義発展論をひとつの重要な基礎ないしは前提としているのではあるが、ロシア資本主義発展論それ自体は、『社会主義と政治闘争』においては、共同体の変ぼうについての若干の言及があるだけで、具体的に展開されてはいない。その具体的な展開は『われわれの相違』を待たねばならなかった。わたしは、ブレハーノフのロシア資本主義論のアクチュアルな意義をあきらかにするため、および後論での論点との連けいのために、ロシア資本主義発展論の内容紹介にさきだつて、『社会主義と政治闘争』『われわれの相違』の基本思想を、ロシア革命論に限って述べておく。そして、そのロシア革命論は、それが批判の対象とするところの人民の意志派のロシア革命論と対照するとき、もつとも具体的に了解されるはずである。³⁾

人民の意志派が考えていたロシア革命のコースは、かんたんにはつぎのように図式化できるであろう。

ツァーリズム打倒・臨時政府の成立→憲法制定議会の召集とそれへの全権力移譲→社会主義への急速な移行。

(1) 人民の意志派は、現時点における緊急の課題はツァーリズム(絶対主義権力)を打ち倒して、民主主義的な政治制度を獲得することであり、ツァーリズムの打倒なしには、いかなる事業もありえないと考える。ツァーリズムはすでに命脈がつきている。「現在の統治組織は、それを倒すものが誰もいなくても、みずから自然死をとげるであろう」⁴⁾しかし、革命党が徒手傍観するばあいには、ツァーリズムのあとを襲うものはブルジョワジーであり、

ひとたびブルジョワジーが権力を握るならばそのときには、「人民の債務奴隸化」はツァーリズムのもとでよりもいつそう深刻化し、革命党はいっそう有効な弾圧を受けるであろう。そのために、ツァーリズムを一刻もはやく革命党・人民の手で倒すことが必要であると、かれらは考えた。人民の意志派のロシア社会の現状把握は、わたくしが前稿で二つの道の可能性の思想と名付けたものの線上にある。すなわち、かれらは、「われわれの国家はヨーロッパの国家とはまったく違っている。……われわれの国家はロシアの国土の半ばを私有財産として所有しており、農民の過半数は国家の土地の小作人である」「ロシア政府は粘土の足をもった鉄の巨像である。それは国のなびとの利益にも依拠して、自分自身のために生活している」「ヨーロッパとはちがって、わが国では国家がブルジョワジーの創造物ではなくて、反対にブルジョワジーが国家によって創られている」などの句にみられるような、国家の特殊ロシア的性格の認識と、いまひとつは、「人民そのもののなかにわれわれは、その古い伝統的な諸原則、すなわち土地に対する人民の権利、共同体および地方の自治、連邦制度の萌芽、良心と言論の自由が、あらゆる圧迫にもかかわらず、なお生きている」という言葉にみられるような、共同体の生命力保持に対する信念とを、ロシア社会の現状認識の中心においている。そして、自然的な道をたどるならば、すなわち革命によって中断されることがなければ、「ブルジョワジーは急速に成長し」「権力がブルジョワジーの手に移るであろう。」⁹⁾ そうなれば、さきに述べたように人民のための革命の変革はきわめて困難になる。かれらは、ロシアがブルジョワ的発展以外の道をもちうると考える点において、二つの道の可能性の思想を継承している。

(2) 人民の意志派は、ツァーリズム打倒のための発端をみずからがつくり出そうとした。党は「民主主義的な政治的変革の思想をすべての住民層のなかに普及する」⁹⁾ ことに努め、とりわけ都市労働者、行政機関、軍隊（とくに

士官層)のなかに組織をつくり、同調者できれば活動家を獲得・養成する。そして「巧妙に遂行されるテロ企画の組織」を有力手段として政府に迫り、「政府を周章狼狽させ、政府から行動の統一性を奪い、同時に人民大衆を鼓舞する、すなわち攻撃の機会をつくる」¹⁰⁾ことを狙う。ツァーリズム打倒のヨリ具体的な方法は、あきらかにされていないが、党が変革の発端をひきうけ、それが人民の重要な部分の叛乱への導火線となるとというのが、かれらの考えである。

そこでかりにツァーリズムが打ち倒されたとするところなるか。さしあたり権力を握るのは、人民の意志党の指導部によつて構成されるであろう臨時政府である。しかし臨時政府の支配は永続化されてはならない。臨時政府はすみやかに憲法制定議會を召集して、それに全権力を移譲すべきである。憲法制定議會は「自由な普通選挙で選ばれる。」「人民の意志は憲法制定議會によつて十分によく表明せられ、提起されるであらう。」¹¹⁾

(3) したがって、憲法制定議會は「人民の意志」党の独占物ではない。憲法制定議會には、さまざまな階層の要求や願望が提出されるはずである。人民の意志党は、あくまで「人民の意志」を尊重する原則からして、憲法制定議會の決定に対してみずからも従うことを誓う。しかし党は徒手傍観するのではなくて、「自己の綱領をもつて人民の前にあらわれ」「綱領を、変革(ツァーリズムの打倒のこと)の時までに宣伝し、選挙戦(憲法制定議會の選挙)の時に勧告し、憲法制定議會において宣伝する」¹²⁾のである。そしてかれらは、党綱領に対してたとい一部の反対はあつても、人民の大勢は党綱領への賛成に傾くにちがいないと考えている。¹³⁾

憲法制定議會を通して実現せられるはずの党綱領の内容は、憲法制定議會の恒常化、言論・集会・結社の自由などの民主主義的諸要求と、「土地の人民への帰属」「すべての工場と製造所を労働者の手に移させるべき諸処置の体

糸¹⁴』という社会主義的要求とから成っている。そしてその両者は、「経済的および行政的単位としてのミールの自立性」[「……ミールの自主性と人民の経済的独立とによって保証される、広汎な地方自治」]¹⁵の主張のごとき、共同的・フェデラリズム的色彩に染められている。人民の意志派は、憲法制定議会を通して、こうしたものがすみやかに実現されるであろうと考えたのである。

(未完。紙数の関係で本節の後半以降は次稿)

① *Сопализм и политическая борьба*, 1883. プレハーノフはこの労作を一八八三年夏に脱稿、『人民の意志通報』、『Вестник Народной Воли』(以下 В. Н. В. と略記) 第一号に掲載する心算であったが、同誌の共同編集者ラヴロフおよびチホミーロフによって掲載を拒否されたので、「労働解放」団の計画していた『現代社会主義叢書』『Библиотека современного социализма』の第一冊として、同年十月、ジュネーヴで小冊子として刊行した。レーニンがこの書を、『マン社会主義の最初の profession de foi』(『レーニン全集』第四巻、邦訳三〇九頁)と称したことは知られている。Пеханов, Соч. т. II, стр. 27-90. 著者 Избранные философские произведения, т. I, стр. 51-112. に所収。本稿は後者に拠る。後者にはその英訳 G. Plekhanov, *Selected philosophical Works*, Vol. I, 1961. があり参照した。竹内訳『我等の対立』(改造文庫、昭和七年)はこの労作の訳である。伏字多く旧訳でもあるため頁数はあけない。

② Наши разногласия. この大著(『史的・元論』より大きい)は一八八四年夏脱稿、一八八五年はじめ、「労働解放」団の『現代社会主義叢書』の第三冊として刊行(於ジュネーヴ)。前記『社会主義と政治闘争』および「労働解放」団の活動は、人民の意志派の理論家たち(チホミーロフとラヴロフ)の反駁を招いた。《В. Н. В.》No. 2, 1884. につづいてこのラヴロフの『社会主義と政治闘争』その他に対する書評および、とくに Тихомиров, Л. А. Что нам ждать от революции?, 《В. Н. В.》№. 2, стр. 1, 1884. 『われわれの相違』はそれに対する徹底的な反批判として書かれた。『社会主義と政治闘争』が、「人民の意志」派のなかにマルクス主義理論をもちこみ、マルクス主義理論によって「人民の意志」派を指導しようという構えで書かれていたのとは異って、『われわれの相違』は、人民の意志派およびその解体過程の理論に対して、あくまで対立的な、敵対的といってもいい姿勢をとっている。『社会主義と政治闘争』から「われわれの相違」まではわずか一年余であるが、

この間に、人民の意志党の襲撃は完全に明かになった。じつさいは、人民の意志党の核心たる執行委員会は、一八八一年三月一日直後に破壊されたのであるが、そのことが外地にいたブレハーンフに確信されるのには、かなりの時間を要したらしい。ブレハーンフは『社会主義と政治闘争』においては、人民の意志党がな相当な戦力を保持していると考えている。だが『われわれの相違』になると、人民の意志派はかつての情熱を失っている。かの三月一日の事件以来過ぎ去った三ヶ年はロシアにおける革命的エネルギーの凋落によって特徴づけられる。この悲しむべき事実は争えない(Исб. фил. пров. т. I, стр. 125)ことを確認している。他方、一八八三年創設の「労働解放」団の、マルクス主義理論普及の活動は順調にすべり出した。『社会主義と政治闘争』から『われわれの相違』への姿勢の変化には右のような背景がある。二つの労作の内容のちがひ、とくに『われわれの相違』において新しく展開された内容は次第以下でとりあげる。しかし、そうした変化やちがひにもかかわらず、本文でいうごとく、ブレハーンフの基本的な考え方にはすこしも変りはない。

『われわれの相違』の原文は、Пеханов, Соч. т. II, стр. 91-356. Исб. фил. пров. т. I, стр. 115-370. に所収。本稿では後者を使用。英訳に同じく Set. Phil. Wks. Vol. I. にある。独・仏および邦語訳はない。この書のアナトールは、『Our Differences』“Our Controversies” “Unsere Meinungsverschiedenheiten” “Nos controverses” 『われわれの意見の相違』などと訳されている。

③ 人民の意志派理論についての以下の叙述は、ブレハーンフの著作中における人民の意志派理論への関説・批判のほかに、鳥山成入氏訳出の綱領関係文芸「人民の意志党の革命理論—資料と解説—」(『スラヴ研究』一五二五—一七〇頁。原典の一部は Народическая экономическая литература, стр. 364-403.) Venturi, F.; op. cit. Chap. 21. ウォーラ・フーイングネル、前掲書を参照。それらによって補足されており、ブレハーンフにはでない部分を含む。

ブレハーンフの綱領的主張の全容は、かれが起草した「社会民主主義的団体(労働解放)の綱領」(一八八四年)『Программа социал-демократическй группы (Освобождение труда)』(Соч. т. II, стр. 357-62.; Исб. фил. пров. т. I, стр. 371-76. に所収)、『「社会民主主義者の第二次綱領草案」(一八八七年)『Второй проект программы русских социал-демократов』(Соч. т. II, 400-404.; Исб. фил. пров. т. I, стр. 377-81. 邦訳『「レーニン全集」の「研究」のこおり第四集』に訳出されている)に要約的に表現されている。しかし、本稿では綱領の全側面を問題にするのではない。本文でいうロシア革

命論とは、ロシア革命の過程についての予測・見通しというほどの意味であって、組織論・戦術論などには立ち入れない。

④ 『スラヴ研究』第一号三〇頁。H・A・モロゾフ起草と推定される「社会主義者と政府」(一八七九年)《Список и правительств》『人民の意志』誌、第一号)のなかにある言葉。前掲島山成人氏の訳に拠る。

⑤ 同書二九、三〇頁。⑥ 同書三四頁。これはチホミーロフの執筆と想定される「党の任務」(一八七九年)《Задачи партии》『人民の意志』誌、第二号)からの引用。

⑦ 同書四四—四五頁。「執行委員会綱領」《Программа исполнительного комитета》『人民の意志』誌、第三号、一八八〇年に掲載)からの引用。⑧ 同書三六—三七頁。⑨ 同書四五—四六頁。

⑩ 同書四六頁。⑪⑫ 同書四五頁。

⑬ 「憲法制定議会においては代議士の九〇パーセントが農民出身であり、そしてもしわれわれの党が巧妙に動くならば、党出身である」(同書三五頁)

⑭⑮ Н. Г. Л. с.р. 386. 邦訳同書四五頁。

〔追記。本稿は昭和三五年度文部省科学研究費(機関研究)による研究成果の一部である。〕